

観察したことを具体的に表現する力の育成

——教科を貫いた「書く」指導を通して——

松本 宏美

一 主題設定の理由

本学級の児童は、国語科の学習において漢字の読み方や文章から登場人物や動作を読み取るような一問一答形式の習得型学習には意欲的に取り組むことができる。しかし、感想文や自分の考えなどを自由に書く活動になると、何を書けばいいかわからず、自分の思ったことや考えたことを言葉として表現することを苦手としている児童が多い。

このような児童の実態の要因は、大きく二つあると考える。一つ目は、書き方や書き出しが分からないことである。どのように文章を書き進めればよいかわからないため、書き始めるまでに時間がかかってしまう。また、書き始めても自分の思ったことや考えたことがうまく整理できず、書き進めることができない。二つ目は書くことに対して自信がもてないことである。授業中によく書けている児童の文章を全体に発表したときに、自分の書いている文章を消して、発表した児童の文章を真似して書いたり何も書いていなかったりする児童が数名いた。後で児童に話を聞いてみると、「違っていたら恥ずかしい。」という理由だった。

このような背景から、児童が日常的に自分の思いや考えを表現できるような取り組みが必要だと考えた。そこで、国語科を中心に生活科の観察記録や日記指導との関連を図り、児童が興味のある事柄について繰り返し書く活動を取り入れたり、書いた文章を褒め合ったりすることによって、意欲的に自分の思いや考えを表現できるのではないかと考え、本主題を設定した。

二 研究の仮説

(一) 自分の考えや思いを何度も繰り返し書くことにより、児童は感じたこと、相手に伝えたいことを徐々に整理し、言葉として表現することができるようになるのではないか。

(二) 書いたことを小集団で伝え合い、児童同士で表現のよさを見つけ合うことで「相手にもっと上手に伝えたい。」「もっと分かりやすく伝えたい。」という表現することへの意欲をかき立てることができるのではないか。

三 研究の方法

(一)「書くこと」を通して自分の考えを表現する力を高める指導の充実

ア 他教科における体験活動と関連を図る

イ 児童が表現しやすくなるように視覚的な指導の工夫

ウ 児童が表現した言葉を活用した指導の工夫

(二)表現する意欲を高めるための場の工夫

ア 表現のよさを見つけ合うためのグループ学習

イ 学級掲示を活用した児童を賞揚する場の工夫

ウ 児童の興味が湧く題材の設定

四 研究内容

実践単元一 国語科 二年生「かんさつ名人になろう」

(一)「書くこと」を通して自分の考えを表現する力を高める指導の充実

導の充実

ア 他教科における体験活動と関連を図った指導の充実

本単元の導入に当たって、まず、生活科「やさいを作ろう」の学習を行った。この生活科の学習では、児童一人一人が自分の好きな野菜の苗を植え、日々世話をすることによって野菜の成長の様子に関心を持ち、大切に育てていくことをねらいとしている。野菜の苗を植えたとき、児童は「これからどうやって

資料① 児童Aが生活科で

最初に書いた観察記録

うえるときとばはをさわてみ
ました。ちとすかいはいました。そめがきをさけ
てみるとちょっともちがたです。
またいえでもつくりたいです。い
えではもとおきひきをつく
はが木にあるきもちよく
なっています。おねえさんです。すい。いけんです。

今日、おくらのはなをうえまし
た。おくらをうえる人は、4人くらい
でした。ははは、10まいでした。
10まいのうち2まいがきおどりで
たかたちは、まるくてぎざぎざで
した。またうえたいです。

資料② 児童Bが生活科で

最初に書いた観察記録

大きくなるのだろうか。」「早く食べたいな。」という思いを持っており、最初の観察記録にも野菜が成長していくことへの関心が表れていた。

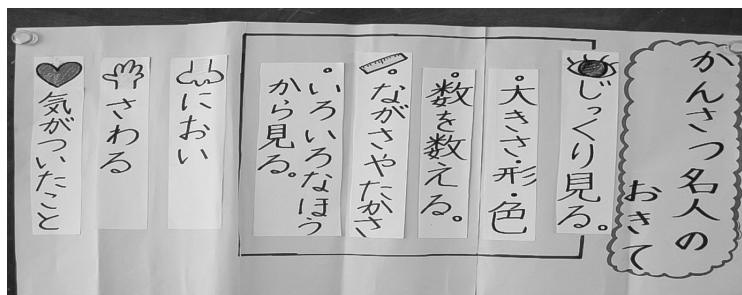
成長の遅い植物では児童の国語の学習と平行して行えないことや、児童の苗への意識も途切れてしまうことを考え、植える苗は短期間で成長が見られる野菜（ミニトマト、トマト、ピーマン、キュウリ、オクラ、ダイズ、ナス）を事前に提示した。

資料①、資料②は、生活科で苗を植えた直後に書いた観察記録である。観察記録を書く前に、「触ったり、葉っぱの数を数えたりしてみよう。」と教師から提示したため、手触りや数は書けていた。しかし、ほとんどの児童が感想や苗を植えたときの状況を説明している記述が多かった。一回目の観察記録は内容の薄いものになったが、生活科との関連を図ったことにより、野菜の苗に興味を持つことができ、観察記録を書くことに対して児童の意欲は高かった。

イ 児童が表現しやすくなるような視覚的な指導の工夫

生活科の学習をきっかけとして、児童一人一人に書くべき材料と、書きたいという思いができた。そこで、国語科の教科書教材をもとにして観察記録の書き方を学習していくことにした。全員で観察記録の書き方を共有するために、教科書に載っている観察記録を拡大コピーし、黒板に掲示した。教科書に載っている二種類の観察記録を見比べながら、どんなことが書いてあると苗の様子が分かるかを見つけ、苗の様子がよくわかる部分

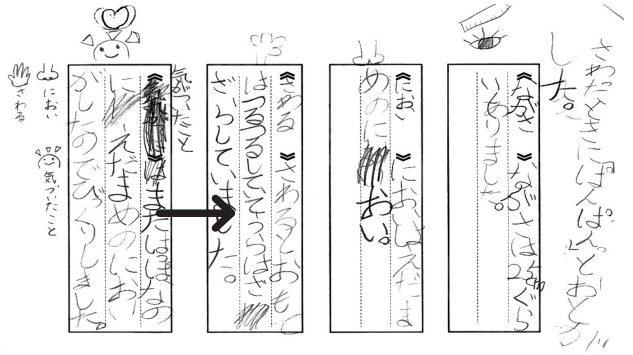
に赤線を引いた。その理由として「色が詳しく書けている。」「長さがあると大きさがよく分かる。」など、児童からでた意見を五感別に分類し観察するポイントを「かんさつ名人のおきて」としてまとめた。



資料③ 観察記録の書き方表「かんさつ名人のおきて」

「かんさつ名人のおきて」を作成し、五感別に分けることで、児童が観察するときの視点がより具体的に明確になった。この「かんさつ名人のおきて」をもとにさらによい観察記録を書くために苗の観察を行った。「かんさつ名人のおきて」を示すだけでなく、観察したことを観察メモに書き込むことで、文章にしやすくなったようであった。観察メモには、自分で記号をかいたり、自分なりに観点を増やして詳しく観察したことを書いていた。

「かんさつ名人のおきて」



資料④ 児童の観察メモ

資料⑤ 児童Aの国語科で書いた
観察記録（通算2回目）

6月 6日（木）は
ミニトマトはなが（ヤ）きました。
つづ花がありました。花のよ
こはミニトマトがありました。
うわしかったです。

を参考にすることで、観察記録には感想が少なくなり苗の大きさや色、においなどについて詳しく書ける児童が増えた。一方で、書き進められない児童には個別に指導し、「色はどんな緑色だったかな。」「においはしたかな。」と問いかけた。すると、色について「薄い緑色だった。」「葉っぱの先は黄色であとは濃い緑だった。」とさらに詳しく書く児童が増えた。資料⑤の児童Aは、一回目の生活科における観察記録のときには、ミニトマトを植えたときの自分の気持ちを中心に記述していた。しかし、二回目の国語科における観察記録は文章の量は少ないが、一回目の観察記録に比べ、苗の様子を中心に観察記録を書くことができた。

資料⑥の児童Bは、観察で分かったことをメモにぎつしりと書き表しており、この段階で苗の様子を詳しく書くことができている。特に、五〇〇円玉という具体物を挙げることで形に加えて葉の大きさを分かりやすく表現しており、さらに詳しい観察記録を書くことができた。

ウ 児童が表現した言葉の活用

本研究では、繰り返し書くことで表現の仕方を知得させることを一つの手立てとしてしている。ただ繰り返し書くだけでなく、児童間で読み合い、表現の交流を図ることによってよりよい観察記録に改善されるのではないかと考えた。そこで、本単元では三回の書く活動に加えて読み合う活動を二回行った。一回目に読み合ったときには、特に詳しく書けていて真似したいと

六月六日(木)ほれ

おくらのほうは、はなきのの四王よりちよと大きいです。まわりがギョギョでももめたいてした。色はきみどり色もあるし、みどり色のもありました。数は六まいでした。さわると、ちよとぎらぎらでした。

気づいたことは、はの糸が大きい
 すゝな、のがあります。はのうらに
 しまりまうか、のがあります。

みどりになった。

みつけたよ
こんなのあるに
きがついたよ

月 十日

付()
雨
工

マフカマフ

いまは、でかいの
もありま

した。そのうち、いざいざ

は
おとさひぐらいてすの

トマトは、大のから小さい

のまゝでなります。母のうえに

あゝたはといふがたき

していますとみすやい

へたの開までくわしくかんさつ

いますね。目でよく見ています。

資料⑦ 児童Aの国語科で書いた
観察記録（通算3回目）

思った友達の観察記録を紹介し、OHCで児童の書いた観察記録を写し、全体で表現の仕方を共有した。そうすることにより、今まで知らなかった観察の視点や書き方が蓄積され、三回目に書いた観察記録ではほとんどの児童が実の色や形などが詳しく書けるようになった。特に、全体的に児童から挙げられていたのは「くぐらいの」や「ー」の形をしています」という具体的な表現である。この表現の仕方は、児童の一人が「キュウリは、はくの顔より大きくなっていました。」と書いてあった観察記録を全体の前で紹介したことから、どの児童も真似して取り入れるようになったものである。

また、友達の観察記録のよかったところをワークシートに書かせることにより、児童同士で表現の仕方や様子を表す言葉などを増やすことができた。そして、資料⑦にあるように、三回目に観察記録を書く前には「もう一度観察したい。」「横からの様子を見たい。」と、書くことへの意欲がさらに高まり、もう一度観察して苗の様子をさらに詳しく書くことができた。

このように、児童間で意見の交流することは観察記録を書くときの表現の幅を広げ、「こんな風に書いてみたい。」という書くことへの意欲付けに繋がった。

(一) 表現する意欲を高めるための場の工夫

表現のよさを見つけ合うためのグループ活動

国語科で通算二回目の観察記録を書いた後、グループごとに観察記録を読み合い、友達の観察記録で詳しく書けているところ

— (さんのよかったところ



よからみるとへびみたいでした。どこ
よからみてるからずいなかて思
いました。

(さんのよかったところ



花の数はいくらでしたのころ
花がいばさるんなて思った
からです。

⑧ つぎの字しゅうでは、どんなことに気を付けて書くを書きかえたり、
書きたしなしたですか。



もともかんさつして白
くわく書きたす。なかも書
たいです。 めい
からめめたんです。

資料⑧ 児童Bの1回目に行ったグループ活動後のワークシート

グループは四〜五人で構成されているため、多い児童で観察記録に三カ所に赤線で印が付くことになる。友達によかったところを線で引いてもらうことで自分の観察記録のよい点が目に見えるようになり、児童の書くことへの意欲も高まったようである。授業後の感想には「よいところを見つけてもらえてうれしかった。」「もっと詳しく書きたい。」「私も〜のようなという言葉を使いたい。」と書かれていた。友達が工夫した書き方をグループの中で共有することで観察の視点や表現の仕方にも幅を持たせることに繋がった。

しかし、赤線の数が多い児童が「いろいろなところを褒めてもらって嬉しい。」と言っているのを聞いて、同じところに赤線が引かれており、赤線の数が少ない児童は「赤線が少ない。」と残念な様子が見られた。赤線の数という量だけに目を向けるのではなく、どのような工夫をしているかという中身の方へ目を向けさせ、表現内容の質の向上を図っていかねければならない。

イ 学級掲示を活用した児童を賞揚する場の工夫

毎時間「かんさつ名人のおきて」から、自分なりに工夫した表現を使っている児童の観察記録をOHCで写し、その場で発表し、詳しく書けている児童を賞揚する場を作った。また、教室の後ろに個人のクリアファイルを用意し、観察記録が増えるたびにその中に入れて掲示することで、友達の観察記録がいつでも見られるようにした。興味を持って見ている児童もいたが、

ろに赤線を引かせた。そして、資料⑧のようにワークシートにどのようなところがよかったかを具体的に書かせていった。グ

全員で賞揚し合う場の設定としては不十分だった。今後は揭示するだけでなく、一人一人の作品を取り上げて褒めたり、児童が手にとって友達の手いた作品を読み、直接感想を伝えたりできるように環境作りに努めたい。

ウ 児童にとって興味を湧く題材の設定

毎朝、水やりから教室に戻ってくると「つばみができたよ。」「葉っぱが前より大きくなって、濃い緑色になっていた。」と苗の様子を詳しく話す姿が見られた。また、同じ種類の野菜を育てている児童同士で成長の早さを競っている姿が見られ、持続的に観察をすることができた。自分で選んだ苗に愛着を持つ児童もあり、苗に名前を付けて大切に育てていた。初めて野菜を育てる児童は苗の成長を毎日楽しみにしており、よく観察することができた。

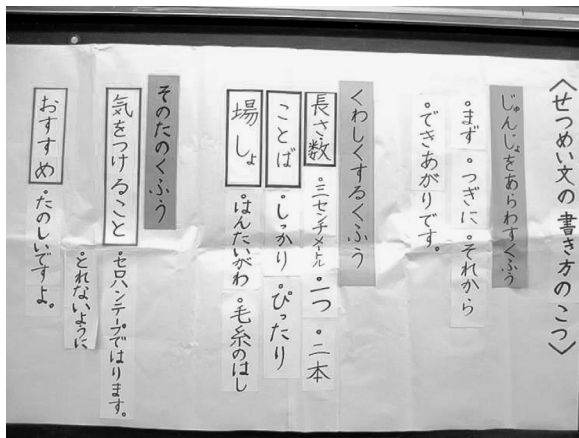
今回のように、導入で生活科の授業で体験活動を行うことで「もっと知りたい。」「分かったことを知らせたい。」という国語科の学習への意識が繋がりを、書く活動に取り組みやすかったのではないかと考える。「苗の様子について知りたい。」という興味や関心を書くことへの意欲が繋がった。また、国語科の学習において観察記録を繰り返し書いていたり、友達と観察記録のよいところを褒め合ったりすることで書くことへの自信もついたようだ。同時に、「大切に育てたい。」「成長を見守りたい。」という生活科の野菜作りに対する意欲も高めることができた。

実践単元二 「おもちゃの作り方」

(二) 年間を通して表現する力を高める指導の充実

ア 他教科における体験活動と関連を図る。

生活科の学習「おもちゃ作り」の学習では、紙コップや輪ゴム、プラスチックの容器などの身近な物を使ったおもちゃ作りを取り組んだ。導入で、教師が実物を作って見せることで「早く作りたい。」「作って遊んでみたい。」という児童の意欲を高めることができた。そこで、以前行った「かんざつ名人になるう」の学習においても生活科の体験活動を導入として単元を構



資料⑨ 書き方名人表「おもちゃの作り方」

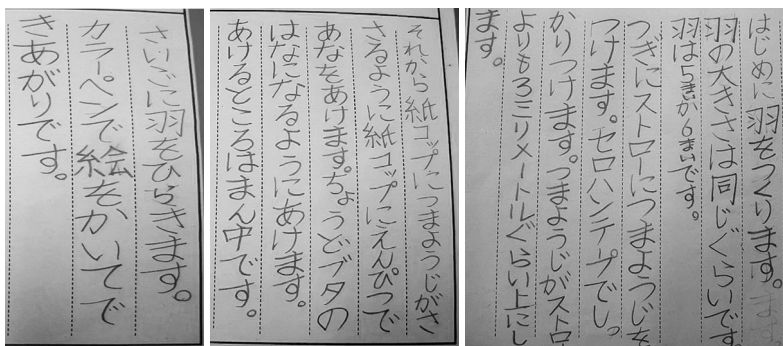
成したときと同様に、児童が興味を持つておもちゃの作り方の説明書が書けるように国語科と生活科に関連を持たせた単元構成を組んだ。

一つ目のおもちゃを作り終えた後に、「他のおもちゃも作りたい。」という声があがったため、教師から「自分の作ったおもちゃの作り方の説明書を書いて、みんなで作れるようにしよう。」という呼びかけを行った。しかし、国語科「かんざつ名人になろう」のときとは違い「書きたい」という意欲的な発言をする児童は少なかった。理由を聞いてみると「説明書は書くのが難しそうだから、書けそうにない。」という思いがあった。このことから、他教科から国語科への繋がりを持たせるためには、児童が「やってみたい。」と思えるような言葉がけや授業の流れを作らなければいけないのだと感じた。

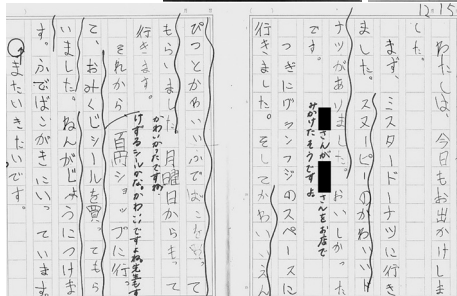
イ 児童が表現しやすくなるように視覚的な指導の工夫

国語科「かんざつ名人になろう」の学習と同様に、説明書の書き方を教科書から学習した。そして、教科書に書かれていた詳しく書くことを表にまとめた。「かんざつ名人になろう」の学習に比べ、書くときの観点が増えたため、児童が思い出しやすいように大きく三つのグループに分けた。今回は観点だけでなく、どんな言葉や表現をすればいいかがすぐに分かるように表に具体例も記入した。

一つ目は「順序を表す工夫」である。「かんざつ名人になろう」では、観察して分かったことを好きな順番に書いてよかったが、



資料⑨～⑩ 児童が書いた説明書



資料⑪ 学習後に書いた児童の日記

説明書には書く順序が大切である。学習指導要領の国語科「B書くこと」においても「自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること」について明記されている。このことから、「まず」「つぎに」「それから」などの順序を表す言葉に注目させ、表に記した。二つ目は「くわしくする工夫」である。説明書ということは、書いている通りに物が作れるよう、内容を詳しく書く必要がある。そのため、「反対側」や「三センチメートル」のような具体的な記述が求められる。三つ目は「その他の工夫」である。児童が自分で考えた工夫点や使うべき道具について書きたいという思いがあったため作ったグループである。順序を表す言葉や詳しく説明する言葉を使って文章を書くことで、順序よく、分かりやすい文章が書ける児童が増えた。

資料⑪のように、この学習の後の日記にも順序を表す言葉を使い、以前より分かりやすい文章を書くことができている。

ウ 児童が表現した言葉を活用した指導の工夫

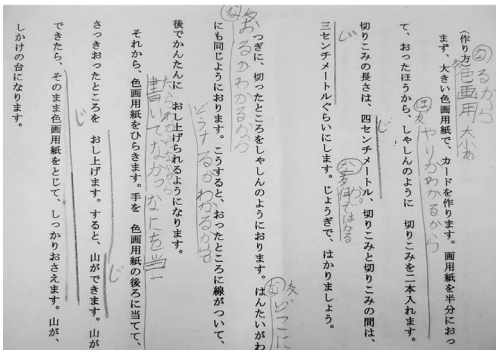
「かんさつ名人になろう」の学習と同様に、児童の書き方でもよく書けているところを全員の前で取り上げ、発表させた。数や大きさのことだけでなく「おすすめや注意することが書けていて真似したい。」と、書くことの難しい「そのたのくふう」に気づいている児童もいた。表現の仕方だけでなく、書くことさらにわかりやすくなる事柄についても取り上げて書いている児童を褒め、たくさん表現の仕方があることを紹介した。

(二) 表現する意欲を高めるための場の工夫

ア 表現のよさを見つけ合うためのグループ学習

① 教科書から読み取るグループ学習

説明書は文章の構成も考えながら書かなければいけないため、最初に個人で教科書から書くこつを読み取った。教科書の文章を打ち出したプリントを配布し、赤線で書くこつを書き込んだ。その後、グループで個々が見つけた意見をすりあわせる活動を行った。すると、自分で見つけた書くこつだけでなく、互いが見つけた書くこつもプリントに書き込み、様々な表現の仕方を共有することができ、「これなら書けそう。」だと言って書く活動に対して意欲的になってきた。



資料⑫ 教科書を打ち出したプリント

② 書いた作品を読み合うグループ活動

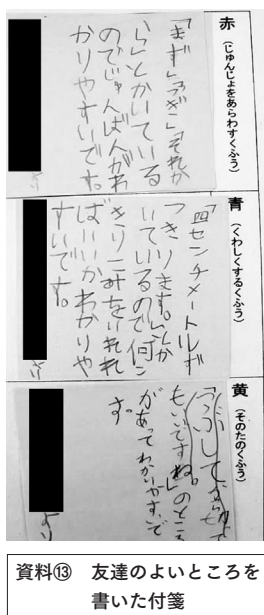
四～五人のグループになり、友達作品のよいところを見つけ合い、付箋によかった理由を書いた。このとき、表で分けていた3つの観点と同じように、付箋も3色に分けて観点別によかったところを

記入した。「前の人と違う色の付箋を使いましょう。」「赤色の付箋が書いた人は青色や黄色のよいところも見つけましょう。」と呼びかけ、友達の説明書のよいところをできるだけ多く見つけられるようにした。

感想では「よいところをたくさん見つけてもらえて嬉しい。」「また書いてみたい。」とあり、書くことへの意欲付けには効果的であった。

イ 児童が表現した言葉を活用した指導の工夫

今回の書き方のこつを示した表は言葉のグループ分けやグループを表す言葉も児童に考えさせ、児童が書くときに想起しやすい言葉で作成した。特に、具体的な表現の仕方を全員で共有することで、書くことが苦手な児童も順序を表す言葉や詳しく説明する言葉を使っており、作り方の手順や道具の具体的な使い方などが書けていた。しかし、書き出すことができて、おもちゃの作り方の手順を文章に表すことができなかった児童も数名いた。この児童には、順序を表す言葉を教師が書いてお



資料⑬ 友達の良いところを書いた付箋

○ 今日の学しゅうのかんそうを書きましよう。

お友だちのえをよんでかんそうとかこつを書けてはんのえがわたしのえをよんでかんそうやこつを書いてくれたのでかき方名人になつたようにながします。

もう一回せつめい書きたい。



き、対話をしながら書き進めていった。

ウ 児童の興味が湧く題材の設定

「説明書」だというと、児童は難しいものと考え、観察記録に比べて書きたい気持ちがあり見られなかった。「観察記録を書こう」のような児童の身近に感じられる言葉を題材名やめあてに使用することが適切だった。

資料⑭ 学習後の児童の感想

五 研究の成果と課題

(一) 成果

最初はどのようなことを書いたらいいか分からず、書き始めることができない児童が多かった。しかし、書き方や表現の方法を表に整理し、何度も書くことにより、観察記録や説明書として文章が精選され、内容の濃いものとなった。

また、小集団で読み合い、友達の書いたものから様々な表現の仕方を知ること、分かりやすく自分の考えや伝えたいことを書くことができた。さらに、友達に褒めてもらうことにより文章量や意欲が増し、書く度によりよい文章に仕上がりに、書くことへの自信がついたようだった。

(二) 課題

どちらの単元においても、書き始めがなかなか進まない児童が数名見られた。また、表を確認したり友達のよいところを見つれたりすることで書くことが明確化できたのだが、書きたいことがまとまらない児童もいた。主語と述語が合っていないかったり、一つ一つの文章が長くなったり、何が書きたいのかが不明瞭になった文章も見られた。このことから、情報を収集するメモだけでなく書きたい内容を整理できるように、書く前に文章全体の構想メモを用意することが必要だったと考える。児童が自信を持って書く活動に取り組めるように文章のモデルを示すことや文章の推敲の時間も確保しなければならない。

また、「書きたい」と思うような題材の設定、導入の仕方ができないと、児童の書くことへの意識は続かない。児童は何に興味を持っているのか、どうすれば授業に取り入れることができるのかを考えながらこれからも教材研究を行い、自分の思いや考えを意欲的に書くことができる環境を作っていきたい。

(まつもと ひろみ・阿波市立大俣小学校)